

平安時代に「尾駮」の名で知られ、貴族に重宝された良馬の産地だったとされる六ヶ所村。そのルーツを探る村「尾駮の牧」歴史研究会(相内知昭会長)が、世界文化遺産の加茂別雷神社(京都市)に伝わる「競馬(くらべうま)」を将来、村内で再現しようと計画している。相内会長は「時の都とつながっていたロマンと村の誇りを、目に見える形で伝えたい」と意欲を見せている。(藤野武)

◆ ◆ ◆
競馬は、現代の競馬(けいば)につながる歴史を持つ。同神社では五穀豊穰(ほうじょう)などを祈って、平安後期の1093年に始まったという。

初夏の例祭で舞楽装束をまとった乗尻(のりじり)騎手(きしゅ)が「左方」と「右方」に分かれ、境内の直線約500mの芝生で速さを競い、吉凶を占う神事だ。

尾駮は、栄華を誇った。

くらべうま 競馬 六ヶ所で再現を

た貴族社会で権力や財力の象徴的存在だった馬の中でも、「荒馬」と和歌に詠まれるほどに名声を博した馬を輩出した。鎌倉時代の武将源頼朝の愛馬「生暖(いけづき)」を生んだとも伝わる。

この歴史を街づくり

に生かそうと、研究会では同神社の競馬を視察。現地の保存会とも交流し、「今度は六ヶ所を訪れたい」との回答を得たという。

研究会では、これまで一般向けの報告会などを開き、六ヶ所の馬産地としての歴史を

紹介してきた。だが、「文献の紹介だけでは理解しにくい」と相内会長。競馬の再現構想は緒に就いたばかりだが、「これからも(保存会との)交流を大切に、将来は村から乗尻を出したい」と夢を描いている。

「尾駮の牧」歴史研究会が計画

馬産地の歴史 伝承目指す



六ヶ所村「尾駮の牧」歴史研究会が村内での将来的な再現を目指している、京都市の加茂別雷神社の「競馬」115日(相内知昭会長提供)